聖書と説教　　2024 年 10 月 6 日（日）聖霊降臨後第 20 主日

新約聖書 マルコによる福音書 10 章 2 節―16 節（新共同訳）

[2] ファリサイ派の人々が近寄って、「夫が妻を離縁することは、律法に適っているでしょうか」と尋ねた。イエスを試そうとしたのである。[3] イエスは、「モーセはあなたたちに何と命じたか」と問い返された。[4] 彼らは、「モーセは、離縁状を書いて離縁することを許しました」と言った。[5] イエスは言われた。「あなたたちの心が頑固なので、このような掟をモーセは書いたのだ。[6] しかし、天地創造の初めから、神は人を男と女とにお造りになった。[7] それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、[8] 二人は一体となる。だから二人はもはや別々ではなく、一体である。[9] 従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」[10] 家に戻ってから、弟子たちがまたこのことについて尋ねた。[11] イエスは言われた。「妻を離縁して他の女を妻にする者は、妻に対して姦通の罪を犯すことになる。[12] 夫を離縁して他の男を夫にする者も、姦通の罪を犯すことになる。」

[13] イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。[14] しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。[15] はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」[16] そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。

※第 1 朗読と第 2 朗読は末尾に掲載

説教「神の国を受け入れる」

夏目漱石は、こう述べています。「全ての夫婦は新しくなければならぬ。新しい夫婦は美しくならねばならぬ。新しく美しき夫婦は幸福でなければならぬ」。

ここでは「新しい夫婦」とあり、「夫婦」の前に「新しい」という言葉が付け加えられています。逆を言うと、人類の歴史上のこれまでの夫婦は、幸福でないことが多かったということではないでしょうか。

本日の福音書は、ファリサイ派の人々とイエスとの離婚についての問答の場面から始まります。イエスを試そうとしたファリサイ派の人々が、夫が妻を離縁することは、律法に適っているかとイエスに尋ねます。イエスは、「モーセはあなたたちに何と命じたか？」と問い、彼らは、離縁状を書くことでモーセは許可したと言います。

申命記 24 章 1 節－4 節には、離婚についての定めがあり、そこには、「妻に何か恥ずべきことを見いだし、気に入らなくなったときは、離縁状を書いて彼女の手に渡し、家を去らせる」と記されています。

文言だけを見るなら、夫が妻を気に入らなくなった場合には、離婚しても差し支えがないことになります。

ですが、モーセがそのように命じた根本精神までさかのぼってみると、この命令は離婚の正当性を認めたものというよりは、むしろ女性の立場を守る精神から出ているのです。

夫の勝手な都合で離婚するのではなく、妻の恥ずべき行為があった時、その理由を書いて正式に離婚せよというのであって、いくらかでも男の横暴な行為を抑えようとするものでした。

その「恥ずべきこと、気に入らないこと」とは何かが、当時の人々の間で議論され、様々な解釈がなされました。「何か恥ずべきこと」とは妻の不貞行為のみという解釈もあれば、「料理をしている時、食べ物を焦がしてしまう」というものまでありました。

律法学者は皆、男性です。何百年かの間に、この律法は男性の都合のいいように解釈され、妻のどんな小さな落ち度でも、夫が気に入らなければ、離縁する正当な理由となっていたのです。

ファリサイ派の人々のイエスへの問いは、男中心の目線であり、男の権力を女の上で行使することに何の疑問も持っていない前提でのものです。

イエスは、その問いに対して、モーセの離縁についての言葉よりもさらに さかのぼって、天地創造の時の創世記の言葉を引き合いに出します。そしてそこから、男女の関係の根源に触れます。「天地創造の初めから、神は人を男と女とにお造りになった。それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから二人はもはや別々ではなく一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない」。

イエスは、彼らの問いに対して、夫婦関係、男女の関係を、人間の創造という原初の根源から捉える答えをしました。それは、女と男を、どちらかが従属関係にあるものではない霊的で対等なパートナー、共に生きる存在として見るものでした。ファリサイ派の人々にとって、イエスの答えは、全く想定外であったことでしょう。

「天地創造の初めから、神は人を男と女とにお造りになった」（マルコ 10:6）。イエスのこの言葉は、創世記 1 章の「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された」（創世記 1:27）からの引用です。そこには、男と女のペアは、神の姿が映し出されたものだと記されているのです。

ここでイエスは、元来、結婚とは、神の本質的な姿を映し出すほどに神秘的なもの、そして神聖なものだと語っています。

また、イエスは結婚という男女の交わりに根源的な意味と価値を置きつつも、他方では、それを必ずしなければならない義務とはせず、さまざまな生き方があることを肯定しています。

マタイ 19 章 12 節でイエスはこのように言っています。「結婚できないように生まれついた者、人から結婚できないようにされた者もいるが、天の国のために結婚しない者もいる。これを受け入れることのできる人は受け入れなさい」。

当時のユダヤ社会では、結婚は子孫繁栄と社会秩序を保つための義務のようなものと考えられていました。しかしイエスは、結婚しない生き方についても触れ、それも肯定しています。

本日の福音書の最後に、イエスはこう言います。「子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」（マルコ 10:15）。

幼い子供というのは、親がどのようであれ、一途に愛し続ける、無条件の愛、魂からの愛を知っている存在です。

幼い子供は、原初の私たちの姿を映し出すものでもあるのではないでしょうか。

神は天地創造の時、男と女が、魂からの愛をもって愛し合い、助け合うことを望まれました。

私たちは、自らが魂からの愛を持つ存在であり、隣人もまた魂からの愛を持つ存在であることを覚え、喜びにあふれて共に歩んで行きましょう。

＊＊＊＊＊＊ 説教ここまで ＊＊＊＊＊＊

以下、本日に関連する聖書箇所（第 1 朗読と第 2 朗読）です。

旧約聖書 創世記 2 章 18 節―24 節（新共同訳）

[18] 主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」
[19] 主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。[20] 人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けたが、自分に合う助ける者は見つけることができなかった。

[21] 主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら
骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。[22] そして、人から抜き取った
あばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られ
ると、[23] 人は言った。「ついに、これこそ／わたしの骨の骨／わたしの肉の肉。
これをこそ、女（イシャー）と呼ぼう／まさに、男（イシュ）から取られたも
のだから。」[24] こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体とな
る。

新約聖書 ヘブライ人への手紙 1 章 1 節―4 節と 2 章 5 節―12 節（新共同訳）

[1] 神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで
先祖に語られたが、[2] この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語ら
れました。神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界
を創造されました。[3] 御子は、神の栄光の反映であり、神の本質の完全な現れ
であって、万物を御自分の力ある言葉によって支えておられますが、人々の
罪を清められた後、天の高い所におられる大いなる方の右の座にお着きにな
りました。[4] 御子は、天使たちより優れた者となられました。天使たちの名よ
り優れた名を受け継がれたからです。

[2:5] 神は、わたしたちが語っている来るべき世界を、天使たちに従わせるよ
うなことはなさらなかったのです。[6] ある個所で、次のようにはっきり証しさ
れています。「あなたが心に留められる人間とは、何者なのか。また、あな
たが顧みられる人の子とは、何者なのか。

[7] あなたは彼を天使たちよりも、／わずかの間、低い者とされたが、／栄光
と栄誉の冠を授け、[8] すべてのものを、その足の下に従わせられました。」
「すべてのものを彼に従わせられた」と言われている以上、この方に従わな
いものは何も残っていないはずです。しかし、わたしたちはいまだに、すべ
てのものがこの方に従っている様子を見ていません。[9] ただ、「天使たちより
も、わずかの間、低い者とされた」イエスが、死の苦しみのゆえに、「栄光
と栄誉の冠を授けられた」のを見ています。神の恵みによって、すべての人
のために死んでくださったのです。

[10] というのは、多くの子らを栄光へと導くために、彼らの救いの創始者を
数々の苦しみを通して完全な者とされたのは、万物の目標であり源である方
に、ふさわしいことであったからです。[11] 事実、人を聖なる者となさる方も、
聖なる者とされる人たちも、すべて一つの源から出ているのです。それで、
イエスは彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、[12]「わたしは、あなたの名を
／わたしの兄弟たちに知らせ、／集会の中であなたを賛美します」と言われ
ます*。

＊12 節の末尾は朗読時「と言い」を「言われます」と読み替えます。

教会讃美歌 292 番「重荷をにないて」1,2,3 節、239 番「ひととなりたる」1,2,4 節、320 番「しあわせなことよ」1,2,4 節、250 番「つくられしものよ」1,2,3 節、416 番「わがゆくみち」1,2,3 節